

平成30年6月12日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370132

研究課題名(和文) 希少性、秘匿性、新奇性をめざす絵画 北方マニエリスムにおける絵画形態多様化の諸相

研究課題名(英文) Rarity, Curiosity, and Novelty: The Diversification of Painting Forms in Northern Mannerism

研究代表者

平川 佳世 (Hirakawa, Kayo)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：10340762

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北方ヨーロッパの画家たちによって16世紀後半から17世紀にかけて制作された特殊絵画の包括的な研究を行うものである。金属板油彩画および石板油彩画が生み出された歴史的背景を検証し、それらが当初イタリアで制作され、その後、イタリア在住の北方画家たちによって北方ヨーロッパにもたらされたことを明らかにした。加えて、こうした特殊絵画に好まれた主題傾向や、支持体が作品に与えた象徴的意味、特殊絵画の展示形態などについて解明した。こうした成果に基づき、絵画形態の多様化は、画家たちが新奇で希少な絵画作品を産み出すために様々な素材を実験したマニエリスム美術を特徴づける現象であると結論づけたのである。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on paintings done with special supports in the late sixteenth and early seventeenth centuries, especially the works of northern European painters. It examines the historical context in which metal and stone plates came to be used as painting support. Through this examination, the research ascertains that metal and stone plate oil paintings were invented in Italy, and northern painters who were active in Italy, such as Bartholomeus Spranger and Hans von Aachen, played a significant role in promoting these new forms of painting in Northern Europe. The research discusses the preferences of themes in these paintings, the symbolic meaning which the materials added to the painted image, and the specific manner of displaying these paintings. The research concludes the diversification of painting forms is a unique phenomenon of Mannerism, where painters experimented with various kinds of materials to use as painting supports and created novel and rare pictorial works.

研究分野：人文学

キーワード：美術史学 西洋美術史 芸術諸学 マニエリスム 北方ヨーロッパ 油彩画 特殊絵画 珍品室

1. 研究開始当初の背景

15世紀の油彩技法の発明、16世紀初頭の画布の普及を受けて、16世紀中葉のヨーロッパでは、「板や画布に描かれた油彩画」という、近世ヨーロッパのタブロー（額縁画）の定式が整ったかみえる。しかし、1570年代には、こうした定式の確立を拒むかのように、石板、金属板、絹等、これまで絵画の支持体（基底材）としてはあまり用いられていなかった素材に、時には意図的な塗り残しによって素材そのものを露出させつつ、油彩や水彩絵具を賦彩した作品が異彩を放つようになる。

私は、これまで、16世紀の北方ヨーロッパ美術について、特にイタリアとの交流という観点から研究を行ってきた。その研究の過程で、実は、銅板を支持体にして油彩画を描く銅板油彩画の流行をもたらしたのがイタリア在住の北方画家たちであったこと、また、この種の新奇な支持体の絵画が工芸品として定着する17世紀後半以降とは異なり、16世紀末から17世紀にかけては、初期のルーベンスを含む、時代を牽引する実力ある芸術家たちが、この種の風変りな絵画を意欲的に手がけていたこと等、数々の知見を得たのである。そこで、銅板油彩画に加え、スレートや大理石などの石板に油絵具で描く石板油彩画や、絹に水彩絵具で描く絹本水彩画など他の特殊絵画を本格的な調査対象とし、「絵画形態の多様化」という一連の芸術現象として包括的な研究を行うことにより、北方マニエリスム美術の理解に今までにない新しい視座が得られるのではないかと考え、本研究に着手するに至った。

2. 研究の目的

以上の学術的背景のもと立案された本研究の目的は、したがって、「北方マニエリスム美術における絵画形態の多様化」現象について、作品に則して実態を詳細かつ包括的に考察し、新たな絵画の在り方を模索したこの時期特有の試みと位置づけることにある。

16世紀後半の北方ヨーロッパ美術には、主として造形表現や様式の観点から、しばしば、ルネサンスの模倣、あるいは、バロックの準備期間といった副次的な評価が与えられてきた。これに対して本研究では、支持体とそれにより規定される造形表現および作品形態、視覚的效果、展示・鑑賞様態の総体として「絵」というものを捉える新たな視点を導入することにより、実は、北方マニエリスムという時代は、額縁に入れ壁に掛けて美的に鑑賞するタブロー形式確立へと向かう西洋美術史の潮流にあって、絵画芸術が既成の枠組みをこえて拡張した稀有な時代であったことを、明らかにすることを試みる。それによって、北方マニエリスム研究の進展に大いに貢献すると同時に、他の地域の美術史研究に対しても新しい思考モデルを提示す

ることをめざす。

3. 研究の方法

本研究は、マニエリスムの時代に北方画家たちによって制作された、主たる特殊絵画である銅板油彩画、石板油彩画、リネン・絹本水彩画等について、該当作例および財産目録など関連史料のデータ・ベース化を行いつつ、中核をなす芸術作品、芸術現象の詳細なケース・スタディを行うという二つの研究手法を併用する。そして、次の5つの論点から各種特殊絵画の比較研究を進め、その差異と共通性を探ることとした。

- (1) 絵画形態の誕生の経緯と北方ヨーロッパにおける流布の様相
- (2) 造形的特徴と主題選択との関連性
- (3) 支持体が作品に与える象徴的価値
- (4) 鑑賞形態と受容の様相
- (5) 同時代人の評価と美的判断

広範囲の対象を扱う本研究では、石板油彩画とリネン・絹本水彩画について、各1年度を割り当てる。さらに、最終年度には、私がこれまで蓄積した金属板油彩画についての知見と合わせて、「北方マニエリスム美術における絵画形態の多様化」現象について包括的な視点から考察し、独自の北方マニエリスム論を構築する、という研究方法をとった。

4. 研究成果

初年度にあたる平成26年度は、北方ヨーロッパにおける石板油彩画制作の中心地である神聖ローマ皇帝ルドルフ2世の宮廷を中心に、調査研究を行った。その結果、1530年代のローマでイタリア人画家セバスティアーノ・デル・ピオンボによって初めて描かれた石板油彩画がアルプス以北に流布する上で大きな役割を果たしたのが、イタリアを訪れた北方画家たちであったことが、改めて確認された。また、アラバスターなどの斑紋が、聖人や怪物など超常的な存在の出現や奇跡を効果的に演出するために意図的に用いられたことも判明した。プリニウスが『博物誌』（第37書第3章）で伝える、斑紋がアポロとムーサたちの姿を象るピュロス王の瑪瑙の指輪など、何等かの象形を示す石の斑紋は、自然自身の手による極めて貴重な芸術作品と捉えられていたこともあり、石の斑紋を絵画表現に巧みに転用することで、画家は、絵筆の力で自然と技を競うという意識も有していたと推測される。こうした石板油彩画は、プラハ城では、キャンバスや板に描かれた通常の油彩画が展示される回廊や広間ではなく、珍品、貴品が収められた「珍品室」に収蔵されていたことが、財産目録より確認される。石の斑紋が画家の構想力を鍛錬するのに役立つとするレオナルドの手稿も当時の画家の間で知られており、こうした芸術理論も石板油彩画の流行を後押ししたと考えられ

る。

16世紀に流行した特殊絵画は、いうまでもなく、各々の支持体特有の造形的効果を有している。滑らかで硬質な銅板は、筆が画地に触れる際の抵抗を少なくすることで、超絶的な細密描写を可能にする一方、スレート板は暗色の色調に馴染みつつ、絵画面の反射を軽減し、ラピズラズリなどの独特の石理模様をもつ鮮やかな石材は、通常の絵の具では表現することのできない不可思議で有機的な色面を画家たちに提供した。こうした各支持体固有の造形的効果に見合った絵画主題の選択を、画家たちは意図的に行ったのか、あるいは、特殊な支持体が、絵画作品全体に何等かの象徴性を与えることはあったのだろうか、といった点については、慎重に見極める必要がある。

最も多く制作された銅板油彩画に関しては、描かれる絵画主題の選択に、特に傾向は見られない。本研究が射程とする17世紀初頭までの作品に関して言えば、銅板油彩画に描かれるのは、圧倒的に物語画が多く、次いで、寓意画である。そして、数こそ少ないものの、17世紀初頭に登場した最新の絵画ジャンルである花の静物画の数点も、銅板を支持体として選んでいる。物語画については、キリスト教主題、古代ギリシア・ローマ神話主題がそれぞれ分け隔てなく描かれたが、それらの物語叙述に共通して見られる特徴は、物語の舞台設定や副次的モチーフの詳細かつ多様で豊かな描写である。アルベルティはその著『絵画論』（1435年ラテン語版、1436年イタリア語版）において、すでに、優れた物語画の条件として、モチーフの豊かさや多様性を挙げているが、こうした条件を十全に満たす描写を銅板という支持体は可能にしたといえる。とはいうものの、絵画面すべてを絵具で塗りこめる銅板油彩画は、その独特の光沢や滑らかさを別にすると、通常の板やカンヴァスなどに描かれる油彩画と仕上がりの点では大差なく、石板油彩画や絹本水彩画に比べ、支持体独自の絵画表現を十二分に発達させたとは言い難い。

一方、銅板という支持体が、そこに描かれたイメージに一種の象徴性を与えた作例も見られる。ブロンツィーノがトスカーナ大公国の公太子フランチェスコ・デ・メディチの婚礼に際して制作した《幸福の寓意》（フィレンツェ、ウフィツィ美術館蔵）や、スプランゲルが神聖ローマ皇帝ルドルフ二世のために描いた通称《ルドルフ二世の治世の寓意》と呼ばれる作品（ウィーン、美術史美術館蔵）がそうした事例にあたる。これらの作品は、君主の美德を称揚する目的で、各種の寓意像を複雑に組み合わせ描かれた小型の銅板油彩画である。宮殿の大広間など公共空間に大画面で描かれる君主称揚の図像が、外に向けたプロパガンダとして機能する一方、こうした小型の寓意画は君主自らが私的空間に所有して鑑賞することを想定したも

のである。この種の個人の美德や事績を称揚して記念する造形物としては、金属製のメダルや浮彫板が先行して制作されていた。君主称揚の寓意画があえて銅板に描かれたのは、こうした金属製メダルや浮彫板の先例を踏まえ、同様の金属板を支持体に使用することで、そこに描かれたイメージを含む絵画作品そのものに、物質的にも象徴的にも、「不朽」という意味合いを持たせる意図があったのではないかと推測されるのである。

続いて、2年次にあたる平成27年度は、リネン・絹本水彩画について調査研究を行った。その結果、絹本水彩画の現存作例は極めて少ないことが改めて確認された。これは、カンヴァスに比べ絹やリネンは脆弱で保存に適さないことに加え、描かれた作品数そのものが実際に少なかったためと推測される。

北方ヨーロッパにおける絵画の支持体としての布材の使用に関しては、中世以来、カンヴァスに丁寧な地塗りを施さず、テンペラや油絵具を粗く直塗りする「布絵（Tüchlein）」と呼ばれる絵画が存在した。丁寧な地塗りの上から絵具層を幾重にも重ねて完成させる通常の板絵に比べ制作時間を大幅に短縮できる「布絵」は、安価で軽量であることから、タペストリーの代わりに壁に掛けられたり、板絵を覆うカバーとして用いられたりすることもあったのである。一方、絹やリネンといった薄く脆弱で高価な布地に透明水彩および不透明水彩絵具で描くリネン・絹本水彩画は、紙や羊皮紙を用いる通常の水彩画に比べ、敢えて高価で脆い素材を用いることにより生じる特別感を狙ったものと考えられる。ドイツの画家デューラーは、友人への贈答品として紙や羊皮紙の水彩画を好んで制作していた。デューラーがラファエロに贈呈した《自画像》（消失）は最初期のリネン水彩画であるが、これは友人への贈呈品としての水彩画の延長線上に生まれたものといえる。その際、デューラーは、上質なリネンがもつ光の半透過性を利用して「ヴェロニカの聖顔布」を想起させる仕方で自画像を描いてみせたが、この逸話が、芸術的技量の卓越さを奇蹟画になぞらえて披露するという絹本水彩画の一つの在り方の原点となったと推測される。

こうした系譜に連なる16世紀後半に制作された現存作品が、ジュリオ・クロヴィオに帰属される《聖骸布》である（トリノ、サバウダ美術館蔵）。本作品では、絹の上に、不透明水彩および透明水彩絵具の具を併用して、周辺部にはキリストの受難伝より「最後の晩餐」から「復活」までの一二場面が描かれている。そして中央には、十字架から降ろされたイエスの亡骸を真新しい布でくるむ様子が、その上方には、今なお聖遺物として崇敬を集めている、キリストの遺骸を包んだとの伝承を有する、通称「トリノの聖骸布」が、絹の布地を絵具で塗りこめずにそのまま転用することにより表され

ているのである。画面上部にはイタリア語で「いとも神聖なる聖骸布の真の引き写し (IL VERISSIMO RITRATTO DEL SANTISSIMO SVDARIO DEL NOSTRO SALVATORE GIESV CHRISTO)」の言葉が書き込まれているが、絹地をそのまま用いた特殊な手法が、聖骸布という聖遺物の描写のために、あえてとられたことは疑いないだろう。キリスト教においては、聖骸布のほかにも、聖ヴェロニカの聖顔布、エデッサのマンデュイオンなど、人の手によらず奇跡によって生み出されたと信じられている伝承上の聖画像があるが、これらはすべて、上質な布地に奇跡によって現れたとされている。本作品は、上述のデューラーの自画像と並んで、絹本水彩画と奇跡画との強い結びつきを示すといえる。

3年次にあたる平成28年度は、研究の総括に向けて、主として、本現象を準備した15世紀以前の状況について調査研究を行った。

本研究が主たる対象とする金属板や石板を支持体とする特殊絵画は、1530年代のイタリアで初めて描かれたが、それに類似した実践はそれ以前にもごくわずかではあるが確認される。テオフィルス著『様々な技術についての提要』(11世紀)には、木板に貼った金属箔に油性顔料で絵を描く手法が紹介されており、これに該当すると推測される中世の遺物もわずかながら現存する。また、エナメル細工の中心地リモージュでは、無色透明なエナメルで金属板を包んで焼き、色付きのエナメル粉を筆で塗ってさらに焼成するエマーユ・パン (*l' email peint, painted enamel*) の技法が15世紀には開発され、フランスの画家ジャン・フーケはこの技法を用いて、独創的なメダル型自画像を制作した(ルーヴル美術館蔵)。一方、デューラーは、板絵を金属板に見立てて鎔の描写を加えることで、聖なる存在の現前を現実的かつ神秘的に表現する試みを行っている(《悲しみの人》、カールスルーエ州立美術館蔵)。

このように、15世紀、進取の画家たちが絵画作品の支持体に着目して、それを操作することで、今までにない斬新な表現を目指したのである。先にも触れたがレオナルドも『絵画論』において、エマーユ・パン技法で制作された「絵画」は彫刻に比する耐久性を有すること、また、石の斑紋は画家の創造力を訓練するのに適した素材であることなど、16世紀の特殊絵画の展開を予見するような言説を残しており、こうした15世紀の諸々の試みが、16世紀の特殊絵画隆盛の素地を整えたといえる。

なお、本研究は当初、平成26年度から平成28年度までの3年間の予定であったが、各種機器備品を丁寧に使用した結果、当初計画していた予算よりも少ない金額で研究を十分に遂行することができた。そこで、予算をさらに有効に活用すべく、補助期間を1年間延長して、追加調査や成果発表にむけた準備

を行い、補助事業目的のより高度な達成を目指すことにした。

これを受けて、改めて最終年度となった平成29年度には、主として、関連領域の最新の研究動向の確認と国内の美術館の所蔵・展示作品の実見調査、および、英文著作出版へむけての研究成果の整理を行った。これらに加えて、国内外に向けて科学研究費補助事業の成果還元を積極的かつバランスよく行うべく、すでに英語論文にて成果公表を行った研究内容の一部をさらに充実させて、日本語での論考にまとめる試みにも着手した。

以上、16世紀後半から17世紀初頭にかけて隆盛した特殊絵画について、その発生と流布の様相、および絵画表現の特性や支持体が絵画作品に与える象徴性や美術理論とのかかわりについて考察を試みた。いくつかの作例を除き、こうした特殊絵画のほとんどは小型のものであり、教会や市庁舎などの大勢が会する公共空間よりも、私的な、規模の小さな空間をその受容空間として志向する傾向にある。上述のように、ルドルフ2世は、ハンス・フォン・アーヘンや他の画家たちに描かせた石板油彩画を、珍品室あるいは芸術室とよばれる貴重な収集品を納めた部屋に保管していたことが、財産目録から知られる。こうしたキャビネ (*cabinet*)、ストゥディオーロ (*studiolo*)、芸術室 (*Kunstkammer*)、珍品室 (*Wunderkammer*) と呼ばれる部屋は、地域、時代によりその性質を変えるものの、大抵は、邸宅の奥深く、主人の寝室近くに設置されており、主人の書斎として機能するとともに家宝を収める収集室でもあり、ごく限られた客人のみがそこに足を踏み入れることが許されていた。こうした私的で権威ある空間におかれ、公から秘匿されることで、この種の特殊絵画はその価値を高めていたと予想される。

鑑賞形態をめぐっても、単に額縁に入れられて壁に飾られていただけではない。例えば、ファン・マンデルの銅板油彩画《スキピオの自制》(アムステルダム国立美術館蔵)は、裏面にも寓意画が描かれており、横長の画面からみても、上述の収集室におかれた貴重品を入れる棚の一部をなしていたと推測される。また、ハンス・フォン・アーヘンがルドルフ2世のために制作した「四大元素連作」(ウィーン美術史美術館蔵)は、黒檀の枠に入れられて、同じく黒檀でできた台の上にはめ込んで自立していたことが財産目録の記載から知られる。こうした仕掛けによって、作品を手にとって光にかざして、アラバスターの半透明の地を透過する光が生み出す独特の効果を堪能することができたのである。これはまさにデューラーがラファエロに贈った自画像に想定された鑑賞法と同様である。

このように、特殊絵画は、その支持体の特殊性だけでなく、鑑賞する様態も、通常のタブロー画とは大きく異なる場合が多い。マニ

エリスム美術には、その英語の単語のもう一つの日本語訳が「マンネリズム」であることから窺えるように、主として造形表現や様式の観点から、ルネサンス美術の踏襲や洗練に終始する形式主義の時代とみなされる、あるいは、来るべきバロック美術の揺籃期といった副次的な評価しか与えられないことがままある。しかし、絵画というものを、支持体とそれにより規定される造形表現および作品形態、視覚的効果、展示・鑑賞様態の総体としてとらえると、実は、マニエリスムという時代は、額縁に入れ壁に掛けて美的に鑑賞するタブロー画形式確立へと向かう西洋美術史の大きな流れのなかにあつて、絵画芸術が既成の枠組みをこえて拡張した稀有な時代であったと位置づけることができるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

平川 佳世、「近世初頭のドイツにおける「悲しみの人」の諸相 プライデンヴルフからデューラーへ」、『ヨーロッパ中世美術論集』、3巻、竹林舎、査読有、2018年、印刷中

平川 佳世、「前近代の美術と社会」、『西洋美術研究』、20号、査読有、2018年、印刷中

HIRAKAWA, Kayo, "Albrecht Dürer's *The Desperate Man: Fleeting Images and the Creating Hand*," *Kyoto Studies in Art History*, vol. 2, 査読有, 2017, pp. 3-18, <http://hdl.handle.net/2433/229457>, DOI: 10.14989/229457

平川 佳世、「希少性、秘匿性、新奇性をめざす絵画 北方マニエリスムにおける絵画形態多様化の諸相」、『哲学研究』、600号、査読有、2016年、105-147頁

HIRAKAWA, Kayo, "The Man of Sorrows in the Staatliche Kunsthalle Karlsruhe: A Reconsideration of Dürer's Gold-Ground Painting," *Kyoto Studies in Art History*, vol. 1, 査読有, 2016, pp. 3-18, <http://hdl.handle.net/2433/229448>, DOI: 10.14989/229448

平川 佳世、「近世ドイツ美術に描かれた学びの場 - ホルバイン兄弟作 学校教師の看板」、『美術フォーラム21』、33、査読有、2016年、35-40、142頁

平川 佳世、「名工たちへの挑戦 15、

16世紀のドイツの版画と金銀細工」、『明治学院大学言語文化研究所『言語文化』33、査読有、2016年、65-88頁

〔学会発表〕(計9件)

平川 佳世、「専門画家の登場と絵画の黄金時代 - ネーデルラントのバロック美術」、『大エルミタージュ展』西洋美術史特別講座、招待講演、兵庫県立美術館、2017年11月25日

平川 佳世、「近世ヨーロッパ美術と修復」、『特別展 日本の表装』土曜連続講演会、招待講演、京都大学総合博物館、2017年2月11日

Hirakawa Kayo, "Albrecht Dürer's *The Desperate Man: Fleeting Images and the Creating Hand*," *Kyoto Art History Colloquium: Appreciating the Traces of an Artist's Hand*, 京都大学、2016年9月25日

平川 佳世、「ドイツ初期版画の魅力」、『聖なるもの、俗なるもの - メッケナムとドイツ初期銅版画』関連講演会、招待講演、国立西洋美術館、2016年8月6日

平川 佳世、「名工たちへの挑戦 15、16世紀のドイツの版画と金銀細工」、『明治学院大学文学部芸術学科・明治学院大学言語文化研究所・ドイツ語圏美術史研究連絡網主催シンポジウム『創造・伝達・記憶の場としての版画』招待講演、明治学院大学、2015年12月5日

平川 佳世、「希少性、秘匿性、新奇性をめざす絵画 北方マニエリスムにおける絵画形態多様化の諸相」、『京都哲学会 平成27年度公開講演会』招待講演、京都大学、2015年11月3日

平川 佳世、「北方ルネサンス美術の巨匠マゼイスが描く日常 《両替商とその妻》を中心に」、『ルーヴル美術館展 日常を描く 風俗画にみるヨーロッパ絵画の真髄』記念講演会、招待講演、京都市美術館、2015年7月25日

HIRAKAWA, Kayo, "The Man of Sorrows in the Staatliche Kunsthalle Karlsruhe: A Reconsideration of Dürer's Gold-Ground Painting," *Kyoto Art History Colloquium: Sacred and Profane in Early Modern Art*, 京都大学、2014年10月4日

HIRAKAWA, Kayo, "Die Erfindung der

Ölgemälde auf der Kupferplatte im
sechzehnten Jahrhundert, " *Aspekt des
Erzählens in Kunst und
Kunstgeschichte*, Reinwaldhaus,
Ludwigshafen-Bodman, 招待講演、2014
年7月11日

〔図書〕(計1件)

HIRAKAWA Kayo (ed.), *Kyoto Studies in
Art History*, vol. 1, *Sacred and
Profane in Early Modern Art*, Graduate
School of Letters, Kyoto University,
2016, 146 pp.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

京都大学文学研究科美学美術史学専修西洋
美術史 教員紹介 平川佳世

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hiraka/

京都大学文学研究科美学美術史学専修西洋
美術史 教員紹介 平川佳世(英語版)

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/en/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hirakawa/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平川 佳世 (HIRAKAWA, Kayo)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 10340762